

ゆるり完成

長浜市富田地先に新たな生活介護施設
「ゆるり」が4月に開設します。

広報

こほくかい 春号

○発行 湖北会 広報室（法人本部内）

○住所 滋賀県長浜市湖北町山本621-5

○発行責任者 赤井 耕太郎

○発行日 平成24年3月15日



新たなる年を迎えて

社会福祉法人 湖北会
理事長 赤井 耕太郎



平成二十四年を迎えましたが、昨年の東北大震災から十カ月、まだまだ現地被災者の方々にとっては、復興の兆しについたところであります。全国民がこぞって応援する必要がある。取り分け弱者・独居老人・一人住まいの障害者宅、障害者施設の復興など、數え上げれば沸々と沸いてくる。どの人も、どんな人も等しく重い命である。当湖北会でお預かりしている利用者の方々も同じである。「両親の無償の愛、時にはそれに代えて守っていく使命がある」、そんなこんなを考えさせられる年を迎ました。

当湖北会も設立三十周年を迎えることとなりました。後日その計画の詳細も発表されることと思いますが、出来るだけ質素な記念式典を行いたいと思っております。また、間もなく長浜市富田地先に生活介護施設が四十人定員で開設いたします。これで概ね湖北地区の知的障害者施設は整ってきたと思います。しかし、時は過ぎゆくもの、早くも「湖北まこも」(旧湖北寮)が開設から三十年が経ち、今や、毎日水関係の修理、建物の漏水・各居室・廊下の修繕・修復に追われる毎日であります。

当湖北会の五カ年計画の重点項目を取り上げ、建て替えに向けた行動を起こす必要に迫られています。「湖北まこも」(旧湖北寮)の建設時には、夕日の見える渡り鳥の飛来地として、五十人の利用者が毎日笑顔で過ごしていたのが懐かしく、現在、三十年の歴史の風雪に耐えた姿を感慨深く眺めている次第です。建設・建て替えに向けた活動を保護者とともに進めてまいりたいと思っております。ご協力の程切にお願い申し上げます。また、前述の通り法人設立三十周年事業も質素にではあるが、地域の方々に支えられて今日の湖北会の隆盛があることを考え、しっかりと足元を見つめ感謝できる物にしたいと思っております。





しうがい者働き・暮らし応援センター 阿藤誠介
“ほっとステーション”

7月10日

13時頃出発するも東北新幹線がダイヤ通りに運行しておらず、19時に仙台へ到着。道中、震災の影響を見た目を感じることはできず、また仙台に到着してもその感覚は変わりませんでした。

ホテルに到着後、明日からの行動について打ち合わせがあり、分かっているだけで女川地区の障害者 122名の名簿の半数が未だ所在確認が出来ていないとのことでした。どこで、どのように生活しているのか？それとも・・・。

勿論、女川地区だけのことではないでしょう。生死にかかわらず、人間として尊厳が守られるよう、明日から使命と、出来ることを精一杯やって行こうと思います。

7月11日

「石巻祥会心会訪問」石巻祥心会ではghが三軒流出、全壊したこと、立ち入り禁止で再建自体ままならず入所者の生活再建できないこと。法人として日本財団の資金を活用し仮設住宅を作り、入所者だけで無く地域の障害者も受け入れているが今後の運営や方向性に不安があるとの事であった。

「石巻地区総合生活支援センター訪問」発達や精神など、手帳を持たない方の状況が見えない事や、支援が行き届かない事に憤りがあるとの事。本部から依頼のあった女川、雄勝、牡鹿については津波の影響が激しく確認出来ない。何より現地に人が居ない事や、避難所を転々とし、会えない。自宅訪問したが会えないままその後訪問できていないので心配との事であった。

沿岸部は壊滅でとても現実とは思えない。小学校が全焼していたり、基礎だけが残った街を歩くとここに普段の生活が存在していたこと自体、想像出来ない。どれだけの命と生活が失われたのか、涙が止まらない。また、その場所から物の数分移動すると視覚的には全く震災の影響が見えなくなり、夢を見ている様な感じであった。

単純にまた大きな地震がきたら怖いなと思う自分とこれから的生活を見据えて片付けられている人と同じ場所に居るのにとても遠い距離を感じた。

災害対策として検討しなければならない事は沢山学ぶことが出来ました。そして、現状がどうなっているかを確認しなければならない事も併せて感じました。あの風景、風や匂い、涙が染み込んだ土。写真や動画では決して感じることが出来ない絶望的な日常と、それを非日常に変えようとする、希望と活力、そして、笑顔の子供たち、絶対忘れません。

7月12日

「雄勝地区到着」被害状況に愕然とする。ありとあらゆる物が破壊され、山の手の1集落を除き誰もいない。厚生労働省の衛生局が調査をしているのと、極少人数が瓦礫の処理をしていた。

「育成会前会長宅訪問」雄勝は地区全体が全壊したが、住民の被害は1名（小学生）のみであった。この地区はもともと地震があれば津波が来ると言っていたので迅速に避難できたとの事。亡くなった小学生は学校を早退し自宅で一人でいたため被害にあったとの事。津波が来た時には二階のベランダで助けを求めていたのを目撃されているが、誰もどうすることが出来なかつたと、87歳の前会長は悲しそうに話されていた。

「女川地区訪問」今までのどの地区よりも破壊が激しい。残骸の山が高さ 10 メートルを超える延々と続いている。住宅は一つもない。丘の上の小学校と陸上競技場が避難場所となっていた。

7月13日

「くじらのしつぽ（牡鹿）訪問」3名の職員体制で 2 名が日勤と夜勤 13 日間を兼ねている。職員の負担大きく、現状何とか踏みとどまっているとのこと。育成会から施設支援で職員派遣を受けてこの状況との事で、増員を要望しているとのこと。セーフティネットとなっている事もあり、職員の負担軽減も重要であり、早急に対応が必要、県育成会に報告し増員の必要性を伝える。

「牡鹿支所訪問」担当者不在で詳しいこと分からないとのことであったが、行政の現状として個別ニーズなどの聞き取りは行っていないとのこと。調査の趣旨を伝えても、はあ、て感じであった。担当者に伝えてもらい、後日訪問し聞き取りすることとなる。

7月14日

初日に指示がなくどうしたらいいかと思い状況把握できていない地域に行き行政や親の会会長、施設など訪問し確認をしてきました。どうせ動くなら、地域の相談支援が行っている活動や動けていない内容について、少しでも手伝いが出来ればと提案し、相談支援協議会のチラシを持ち歩き、ニーズのある方や行政から渡してもらうようにお願いしたりして拾いあげ、掘り起こし、少しでも早く声が届くようにと思って活動しました。

今日、石巻女川地区育成会会長と面談し、概ねこの地域の現状が把握できました。

ぶ が い



粘土部会

今年度、芸術創造社タケアート、アーチスト竹尾久之氏の指導のおかげで、「陶板造り」を粘土部会の一大事業計画として行うことが出来、ワークスさぼてん横に新設される事業所「ゆるり」の玄関の壁を、みんなの作品で埋め尽くすという一大企画になりました。お陰さまで、沢山の方が陶板造りに参加され、順調に進んで内装工事には間に合いそうです。

「ゆるり」の玄関だけではなく、「本部」も建物の中に移設され、その玄関も陶板で飾られる予定です。皆さん、完成を楽しみにしておられ、活動にも一際意欲を注がれています。



竹尾先生の指導のもと笑顔で楽しく頑張っています。

第8回滋賀県施設合同企画展 in g（ボーダレス・アートミュージアムNO-MA・近江八幡市）、第14回「土と色展」（京都展）、「KOHOKU アール・ブリュット展」（浅井文化ホール）、「2011 KOHOKU ふれあい広場文化祭」（湖北公民館）等への出展も行い、みんなの粘土作品の魅力を地域にアピールしました。



湖北公民館



浅井文化ホール

ねんど



「ふくらの森」では、
玄関に皆さんの力作が
ガラスケースに展示され、
訪問される方の目を引いています。

体育館部会

H23年体育館部会を振り返って



湖北会の体育館部会はH21年度より始まり、今年度で3年目になります。今年度は、「グラウンドゴルフ」「ボーリング大会」「ウォークラリー」「風船バレー大会」を行いました。体育館部会という名称ですが、体育館で行う活動にとらわれず、各事業所が集まり、交流をしながら、楽しく体を動かすことを目的としています。開始した当時は、どんな活動を提供すれば良いのかわからないまま、手探り状態で活動を行ってきましたが、普段交流することが少ない各事業所の利用者の方々が一緒に活動

し、楽しそうに体を動かしている姿を見ると、職員としても嬉しい気持ちになります。これからも、利用者の方々によりいっそう楽しんでいただけるような活動を提供していければ良いなと考えています。



会報告



店舗部会

おいでやす長浜

ワークスさかた経営

長浜駅前 平和堂 5階



昨年は、NHK大河ドラマ「江」～姫たちの戦国～の影響を受け、平和堂長浜店5階『おいでやす長浜』へ多くのお客様を迎えることが出来ました。今年もお客様に喜ばれるよう新たな店舗となるよう従業員一同力を合わせて取り組んでいきます。皆様のご来店をお待ちしています。

ぱんげあ

ライフまいばら経営

米原市顔戸 フタバヤ近江店西側



ぱんげあは1月末で2周年を迎えます。

月曜日以外の毎日、ライフまいばらから2~3人がぱんげあ勤務に入っています。

朝は立て看板をフタバヤさんに設置することから始まり、喫茶スペースの掃除やあげぱん作りの準備をしてお客様のご来店をお待ちしています。

あげたてのあげぱんをお渡しするため、注文をきいてからお客様をお待たせしない工夫と手際よく作業することが大切です。喫茶ご利用のお客様には言葉使いに気をつけて丁寧な接客を心がけています。

「どうしたらお客様に喜んでいただけるか」を皆で考えながら『笑顔の集まるぱんげあ』を目指してがんばっています。

喫茶四季の森

いぶきやま経営

長浜市平方町 湖北合同庁舎内



喫茶四季の森は、湖北合同庁舎内で2000年9月より営業しています。県の方からしうがいを持つ人の働く場や、就労訓練の場として場所を提供して頂き、しうがい者の職場作り、一般就労に向けた実習の場として大きな役割を果たしております。利用される皆様が、コーヒー一杯で、ホッと心温まる癒しの空間になれればと思います。是非、気軽に利用して頂き交流の場所として利用して頂ける事をお待ちしております。

店舗部

部会の取り組み

お店で働く仲間の中には毎朝、衛生チェック（頭髪・爪・制服の乱れ等）と大きな声で挨拶（「いらっしゃいませ」・「有り難うございました」等）の唱和を行っているところもあります。サービス業にとって大切なことです。その他の店舗にも導入していきたいと考えています。

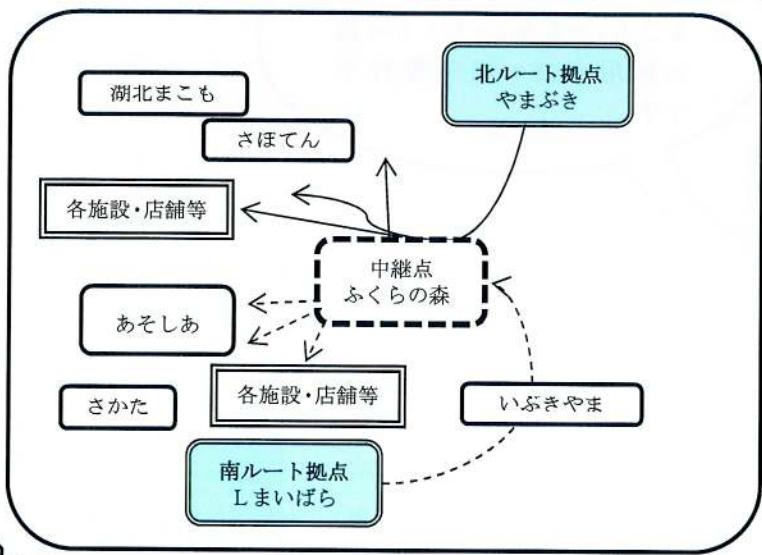


店舗の目標

当部会は、事業所が経営する店舗の経営状況と今後の店舗展開について話し合ってきました。現在、湖北会が経営する店舗は、ワークスさかたの「おいでやす長浜」、ライフまいばらの「ぱんげあ」、いぶきやまの「四季の森」の三店舗です。それぞれに大きな課題を持ちながら利用者と職員は各店舗で様々な工夫を凝らしながらお客様に喜ばれるお店を目指しています。

ルート部会

現在法人内では、図のように、北ルートを拠点とするやまぶきと、南ルートを拠点とするライフまいばらが中心となり、湖北圏域を網羅する形で自主製品の配達・販売を行なっています。ルート部会におきましては、この流れがスムーズに行くように日々調整、意見交換をしながら少しでも自主製品の販路拡大につながるよう努めています。今後もいろいろご意見をいただき皆さんとのニーズにこたえられるような提案ができたらと思います。ご協力お願ひいたします。

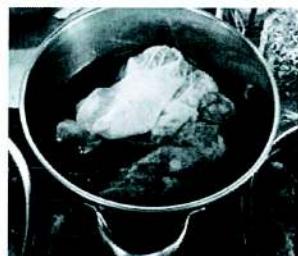


楽彩だより

～手織り部会～



自然から『色』をもらって糸を織る、
草木染めの手間と言ったら、



①材料を煮て
②色を出して



③染めて



④絞って干して
⑤紡ぐ・・・

きびがら
玉ねぎの皮
マリーゴールドを使って

その作業の工程の長いこと・・・。

しかし、出来上がったその色は、既製のものと違って、微妙な色を出しほのぼのとしてほんとも優しい風合い。

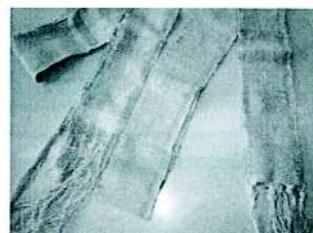
そして、現在進行形で湖北
まこも・やまぶき・ふくらの森
の利用者様が織物製作中
です



手間のかかった貴重な素材だからこそ、できあがった織物は、とてもいい感じになっています。

只今製作中のコースターは、楽彩の最初の商品として、皆さんに
ご紹介の準備中です。

質にこだわった楽
彩の手織りを、ぜひ
みなさんお楽しみに。



イベント部会

イベントプロジェクト発足

湖北会の自主製品販売チャンスの拡大、売り上げの向上、また職員の研修の場として、事業所の枠を取り払って販売に尽力していこうと進められたのがイベントプロジェクトです。

地域のイベントをキャッチし、スタッフと相談しながらイベントへの販売準備を調べていきます。

それぞれのイベントの規模や、前年の売れ筋等々を考慮しながら販売商品の内容や量を決めて行くわけですが、調整はしばしば難航します。

皆が携わろうという目的でもあり、慣れない者は四苦八苦の連続…大変な作業です。

しかし、製造事業所だけでなく法人の他の事業所も販売に関わっていくというスタンスは、今まで同じ法人内でありながら知らなかつた商品を知り、また販売のノウハウを身につける貴重な機会となっています。



そんな中、湖北会としての被災地支援の一貫として被災地の事業所製品の販売を担うこととなり、11月より、東北の担当者の方とお話をさせていただきながらやり取りを始めました。この繋がりを絶つことなく続けて行くことが何よりの支援と信じ、地道に進めて行きたいと考えています。

身体表現ワークショップ

身体表現
ワークショップ

身体表現ワークショップはもともと県の社会福祉事業団が実施している事業です。現在ワークショップ部会として「あそしあ」「湖北まこも」「ライフまいばら」「いぶきやま」の利用者さんが月2回集まり、約20名で活動しています。

プロのダンサーのナビゲーターによって、難しい振付を覚えながらダンスしていくのではなく、参加している利用者さん自身から生まれてくるダンスをつなぎ合わせていきます。人の動きを自分なりに真似したり細かなルールは存在せず、皆さん自分なりの楽しみ方でダンス（自己表現）されています。



ナビゲーターの「野田まどか」さん

毎年11月に開催される糸賀一雄記念賞音楽祭で、他の県内7か所で行われている様々なワークショップ（打楽器、合唱、など）約170名と1つのステージを作っています。

普段見られない利用者さんの表情や一面、新たな可能性を見ることができ皆で楽しく活動しています。



創作ダンス

創作ダンス

毎月第2木曜日に浅井文化ホールにて活動しています。ラジオ体操やがんばらんば体操など、なじみのある体操でからだを動かしていくことから始まり、自分たちで考えて動き・表現するまねっこダンスや音楽にあわせて自由に



踊る時間、フォークダンスをヒントしてみんなでつながりをもったりなど、いろいろなメニューを組み合わせて活動しています。参加される利用者が、からだを動かすこと表現することの楽しさを感じもらったり、リフレッシュしていただけるような時間になっていくといいなあと思います。

音楽療法



南エリア



**音
樂**

療

法

部

会



南エリアではあそしあ・いぶきやま・ライフまいばらの3つの事業所が一緒に活動をしています。

今までの音楽療法の活動を、毎月第2第4月曜日に米原市青少年ホームで森田先生の指導により実施。合唱・合奏など楽しく音楽に親しみ、スヌーズレンではリラックス。

今年度はさらに 第1第3月曜日にヨガを行なうことになりました。ヨガは日本ヨガ連盟の方に講師をお願いしています。ヨガマットをもって、米原市人権総合センターにあります、心と体のバランスが整えられるよう取り組んでいます。



北エリア



北部音楽療法では、各事業所が担当を持ち3つのグループ（若者向け、高齢者向け、ヨガ）に分けて音楽療法を行っています。若者向けでは、少しアップテンポ曲、高齢者向けには、スローテンポな曲などを使い行っています。もうひとつは、講師を招いてヨガを取り入れています。音楽療法と言えば、専門性が必要で講師なしでは行っていけないと始め思いましたが、部会会議を設ける中で「そんなに硬く考える事なく、利用者が喜んでくれる事をやっていこう。」と言う声があり現在も講師なしで行っています。始め、担当事業所の職員が一人で利用者を動かしていましたが、現在は、

担当事業所の職員さんのサポートにまわり、みんなで支えて行っていこうと言う気持ちを持つようになり、良い雰囲気で活動を行っています。その影響か利用者も楽しく活動に参加されています。



ほっぷる

取り組み・今後の目標

23年度4月より、入所施設利用者の職住分離を目的とした、生活介護事業所として『まこも』従たる事業所『ほっぷる』がスタートしました。

現在の利用状況は、まこも10名（地域より1名利用）あそしあ9名 計19名の方が利用されています。

活動内容は、リサイクル作業（アルミ缶潰し ペットボトルラベルはがし）下請け作業に取り組んでいます。



『ほっぷる』として大切にしていること

1. 日中の活動を通して利用者の特性を支援者が知り、特性を理解して支援に繋げる。
2. 利用者の特性を理解して、利用者が生活しやすくなるように日常生活の環境を整える。
3. 利用者の特性を理解して、生活施設との連携をはかり日常生活に般化させる。
4. 利用者の特性を理解して、個々の違いを知り、個別支援に取り組む。
5. 支援者は、一人でケースを抱えこむのではなく、複数の支援者で相談しながら支援に取り組む。1人の利用者をチームで支援する。

この5つを支援の柱として取り組んでいます。そこで欠かすことの出来ないことは、利用者の行動観察=アセスメント（評価）です。

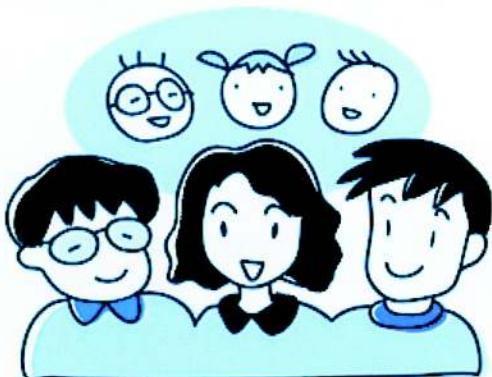
アセスメントで注意していることは

1. 社会性 対人関係はどんな感じか
2. 言語 コミュニケーションの理解はどうか
3. 情動的な行動 何に興味を持っているか
4. 強迫的な行動 変化に対しての特性はどうか
5. 感覚的に妨害になるものは何か
6. 注意の特性はどうか
7. 組織化における特性はどうか
8. 般化の特性はどうか

以上のことについて行動観察を行っています。



『ほっぷる』での



また、利用者の特性を知ることで、出来ないところを無理に出来るようにするのではなく、出来る所、出来そうな所に注目し、そこを利用者の特性に応じてさらに支援に繋げるよう心がけています。ようは、人間誰でも出来ないことはどうあがいても出来ないので。利用者、支援者一人一人がお互い出来ないところを支え合える環境を目指しています。このような所に注意しながら1年間活動してきました。その中で入所施設当初の様子は、

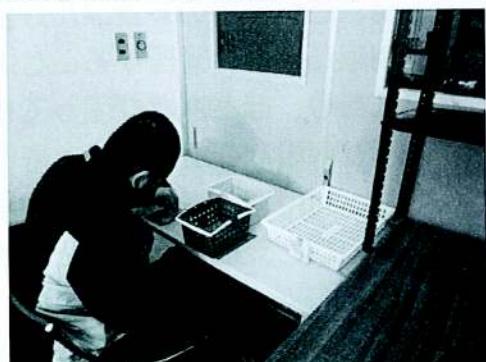
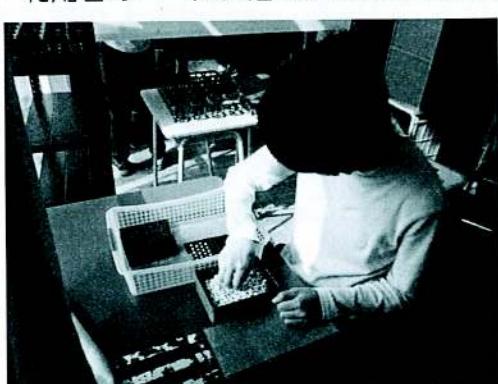
- ・居室から出にくく昼夜が逆転しがち。
- ・利用者のパニック他害、自傷行為などがある。
- ・施設から出て行き、民家に侵入したりしてしまう。
- ・要求、拒否が出来ない。

などの複数の不適応な行動がありましたが、『ほっぷる』を利用したこと（職住分離をしたこと）により、そのような不適応な行動は減り（全く無くなったわけではありませんが…）1日活動に取り組むことが出来ています。

『ほっぷる』で支援していくなかで、不適応な行動は、障がいが有るがゆえに利用者自身に全て問題があるのではなく、利用者を取り巻く環境に問題があるのだと、改めて気づくことが出来ました。

私達支援者は、問題行動だけに注目し、問題行動を無くそうと考えがちですがそうではなく、障がいの特性を理解し、環境を整えることで、不適応な行動は確実に軽減するのです。本来、支援者を含む、周りの環境がしっかり整い一貫した支援が出来れば、問題行動、不適応行動などの言葉自体存在しないかもしれません。

今後、『ほっぷる』での活動を通じて、さらに地域に根付いた支援が出来るよう、また、地域・利用者のニーズに沿った支援が出来るように取り組んでいきたいです。



GH・CH

GH・CH現状報告

平成23年10月より、2名の方と新規に利用契約を結ばせていただきました。うち女性1名は入所施設「あそしあ」からホーム「いぶき」へ。4月からの移行計画に基づいて体験利用を数回経験された後、十分にホームでの生活が可能と関係者も判断し、ようやく移行となりました。ご本人は意向を強く望まれていたので、ホーム利用が実現しても喜んでおられます。ホームでの生活も安定していると思われ、ご家族・関係者もほっと一安心。もう1名は遠く愛荘町の男性の方。圏域を越えてはいますが、諸事情を鑑み、こちらも体験利用を経験していただいた後、ホーム「浅井」を利用となりました。日中活動先は「ふくらの森」とされ、安定した生活を送られています。

また、11月にはホーム「いぶき」を利用されていた女性1名が、ご家族の事情およびご本人の強い思いがあり、利用契約解除となりました。

さらに、現在、入所施設「まこも」から男性利用者の移行計画を受け、平成24年2月ごろからの体験利用を「いぶき」において検討中です。昨年度より体験利用事業を開始し、ホームの利用枠も増やしてきましたが、上記のような理由で、体験利用ができるホームは「おうみ」1か所となっています。

さて、ホームの利用者については概ね落ち着いた生活を送られていますが、時にはトラブルも発生します。特に最近では、携帯電話を所持される利用者が増え、連絡等には便利になったもの

の、その反面、使いすぎて利用料が多額になったり、悪質なサイトに引っかかってお金を請求される等のトラブルが多くなっています。利用者本人が望んでされることを制限したり、管理することは支援者側としては出来る限りしてはならないことでもあり、ほとんどが困って相談された後の対応となってしましますし、法的な処理が必要なこととなると専門家に委ねるほかなくなります。ホーム関係者としては、利用者の様子の変化を早めにとらえ、ことが大きくなる前に対処するしかないのかと支援の困難さを痛感しています。

